

令和6年度第78回栃木県芸術祭文芸賞審査結果（創作部門）

- 応募者数 21人（17人）  
○ 入賞者数 6人（8人）（ ）内は昨年度実績

【審査寸評】

○ 作品総括

応募作が増え、内容も豊かになった。  
事実関係などをよく調べて書いた作品が多く見られた。

○ 文芸賞 「消しゴム」

商店街の中ほどにある「ギャラクシー」に集まる三人の男たち。  
大量の消しゴムで東京タワーを作る、というアイデアやキャラクター  
の書き分けなどに筆力を感じさせる。最後の一文が効いている。

○ 準文芸賞 「失くしたもの見つけます」

現実とメルヘンの調和。  
ほのぼのとした作品で、読後感もよい。

○ 準文芸賞 「見果てぬ夢」

孫娘が巻き込まれた事件から、自らの過去を思い出す。  
単なるノスタルジーでないところがよい。

【入賞者名・作品名】

○ 文芸賞

しばさき さちこ （宇都宮市） 「消しゴム」

○ 準文芸賞

にしぞの たかこ （宇都宮市） 「失くしたもの見つけます」

かまた たいじ （宇都宮市） 「見果てぬ夢」

○ 文芸奨励賞

あたゆうすけ （宇都宮市） 「さよならキーウ」

しまだ とみこ （宇都宮市） 「川辺の野萱草」

おおいずみ ようこ （宇都宮市） 「俺の行く道」

○ U25賞

該当者なし

令和6年度第78回栃木県芸術祭文芸賞審査結果（随筆部門）

- 応募者数 27人（33人）  
○ 入賞者数 8人（8人）（ ）内は昨年度実績

【審査寸評】

○ 作品総括

応募数が減少しているのは残念だった。しかし、字数（20×20、5枚）がきちんと守られるようになったのは、良い傾向である。

随筆は登場人物が少なめの方が焦点がしぼられて良い。また、読み手の心を前向きにさせる内容が望ましい。

全体としては、日常に即して世相を反映した作品が多く、よく書かれていた。

○ 文芸賞 「余笹川」

数年前、栃木県北部を襲った集中豪雨、その被害者の一人は筆者の弟の恩師だった。その人の生き様を思い、彼をのみ込んだ余笹川に追悼の念を捧げる気持ちが伝わってくる。

○ 準文芸賞 「チューリップの不在」

人に代わってAIが物事を取り仕切るようになった現代、便利さとは裏腹の人間不在という社会、そのさびしさと違和感が、経験を通して伝わってくる。

○ 準文芸賞 「シャーベットカレー」

女性が働くこと、共働きが難しかった時代の中で懸命に頑張ってきた作者の体験がリアルで胸を打つ。そしてついに職業婦人としての人生を貫けなかった筆者の思いも伝わる。時代や社会の中で、女性のあるべき姿を考えさせられる作品である。

【入賞者名・作品名】

○ 文芸賞

橋本 幸子（那須塩原市）「余笹川」

○ 準文芸賞

山田 亜友子（千葉県千葉市）「チューリップの不在」

吹木 文音（宇都宮市）「シャーベットカレー」

○ 文芸奨励賞

苧屋 紀子（鹿沼市）「生を生きる」

山口 昭（宇都宮市）「こころのお薬」

国母 仁（宇都宮市）「復興の手」

竹澤 美恵子（宇都宮市）「天狗山とわたし」

渡邊 成一（真岡市）「車椅子での散歩」

○ U25賞

該当なし

令和6年度第78回栃木県芸術祭文芸賞審査結果（詩部門）

- 応募者数 44人（46人）
- 入賞者数 9人（8人）（ ）内は昨年度実績

【審査寸評】

○ 作品総括

詩とは何ぞやという命題は、詩の表現者を悩ませるものであるが、萩原朔太郎は著書「詩の原理」の中で、詩は“情象”であると述べている。小説や絵画等と違って描写に片寄ることなく、作者の感情表現が大切だとのことらしい。今回の芸術祭文芸賞の作品も、そこに重点を置いて審査した。

○ 文芸賞 「ヒヨドリと蒼空<sup>あおぞら</sup>」

ヒヨドリのことを描写しながら、次々と対象が変わり、遠くの戦争などにも批評が及び、全体として見事な作品となっている。

○ 準文芸賞 「ポテトサラダ」

詩における連と連のつながりがよく出来ている。作者の立ち位置がもう少しハッキリするとさらに良い作品になる。

○ 準文芸賞 「荒縄<sup>あらなわ</sup>」

荒縄から受けるイメージを自分の人生になぞらえながら表現しているのがよい。比喻の書き方にも工夫が見られる。

○ U25賞 「父よ<sup>ちち</sup>」

還暦を迎えた父と25歳の僕の腕相撲の場面を、ユーモラスで温かい作品にしている見事である。

【入賞者名・作品名】

○ 文芸賞

くぼかわ けんいち（宇都宮市） 「ヒヨドリと蒼空<sup>あおぞら</sup>」

○ 準文芸賞

ながしま かずひこ（大田原市） 「ポテトサラダ」

きしの みよこ（栃木市） 「荒縄<sup>あらなわ</sup>」

○ 文芸奨励賞

せきや ひいず（佐野市） 「落葉<sup>おちば</sup>ひらひら」

あくつ たみこ（宇都宮市） 「桜橋<sup>さくらばし</sup>」

やしろ あつし（鹿沼市） 「猫地図<sup>ねこちず</sup>」

やしろ よしお（宇都宮市） 「幸せな時間<sup>しあわじかん</sup>」

かりや のりこ（鹿沼市） 「その夏<sup>なつ</sup>の色<sup>いろ</sup>」

○ U25賞

こばやし ひろみ（益子町） 「父よ<sup>ちち</sup>」

令和6年度第78回栃木県芸術祭文芸賞審査結果（短歌部門）

- 応募者数 35人（34人）  
○ 入賞者数 9人（6人）（ ）内は昨年度実績

【審査寸評】

○作品総括

今年度は全体的に質の高い作品が揃っていて、読みごたえがあった。充実した歌が多い。氏名から察するに、男性、60代～70代の比率が高い。歌の内容がバラエティーに富んでいて、選び甲斐があった。

○文芸賞 「惜春」<sup>せきしゆん</sup>

審査員総点50点中48点を獲得し、堂々の1位である。構成力のすばらしさが光る。

「 」書きにされた君の科白が効果的であり、夫婦の思い合う姿が感動的である。

○準文芸賞 「炎天の街」<sup>えんてん まち</sup>

誰にも詠み得ぬ回想詠で、どうしても詠み残さずにはおれないという思いが迫力となってせまる。

○準文芸賞 「命つなぎて」<sup>いのち</sup>

自分の余命宣告を詠いながら、落ち着いた詠み振りでしみじみと詠いあげている。構成もうまくまとめている。絶望の中にも救いを感じる。

○U25賞 「春から」<sup>はる</sup>

若々しく清々しい言葉に対する感性がよい。将来が楽しみである。

【入賞者名・作品名】

○ 文 芸 賞

<sup>ながたけ かずお</sup> 長竹 一雄 （宇都宮市） <sup>せきしゆん</sup> 「惜春」

○ 準文芸賞

<sup>あおき かずお</sup> 青木 一夫 （さくら市） <sup>えんてん まち</sup> 「炎天の街」  
<sup>かわさき としお</sup> 川崎 利夫 （壬生町） <sup>いのち</sup> 「命つなぎて」

○ 文芸奨励賞

<sup>ひやま</sup> 檜山 かおり （宇都宮市） <sup>ばくしゅう いえ</sup> 「麦秋の家」  
<sup>なかやま ゆきお</sup> 仲山 行郎 （栃木市） 「マーおばちゃんみせの店」  
<sup>ふじい</sup> 藤井 ツヤ子こ （鹿沼市） <sup>ついおく</sup> 「追憶」  
<sup>たかむら みつお</sup> 高村 光夫 （鹿沼市） <sup>あめ</sup> 「雨」  
<sup>やまぐち ひでお</sup> 山口 秀雄 （益子町） <sup>ななじゅうくねん</sup> 「七十九年」

○ U25賞

<sup>おおしま みおん</sup> 大島 海音 （さくら市） <sup>はる</sup> 「春から」

令和6年度第78回栃木県芸術祭文芸賞審査結果（俳句部門）

○ 応募者数 42人（38人）

○ 入賞者数 8人（8人）（）内は昨年度実績

【審査寸評】

○ 作品総括

応募作品は42点で、前年より4点多かった。しかし、全体的に傑出した作品が少なく、票が分かれた。

句として、何がどうしたというような報告調が目立つ。誤字・新旧仮名の間違いも散見された。

○ 文芸賞 「茅花流し」<sup>つばななが</sup>

「余生」と小差で文芸賞となった。

一句一句が丁寧に詠まれて感動を与える。俳句作品の把握がしっかりしている。生きているものへの愛情が感じられる。

○ 準文芸賞 「余生」<sup>よせい</sup>

老年を迎えられた作者が、生活の一コマを切り取った句が多く、一年間を通しての日常吟で、うまくまとまっている。

○ 準文芸賞 「傳習所」<sup>でんしゅうしょ</sup>

益子の陶芸をテーマに場面が生き生きと描かれており、臨場感もあって佳句が多かった。

【入賞者名・作品名】

○ 文芸賞

岸田<sup>きしだ</sup> 雨童<sup>うどう</sup>（宇都宮市） 「茅花流し」<sup>つばななが</sup>

○ 準文芸賞

梧桐<sup>あおぎり</sup>（さくら市） 「余生」<sup>よせい</sup>

五十嵐<sup>いがらし</sup> 藤重<sup>とうじゅう</sup>（宇都宮市） 「傳習所」<sup>でんしゅうしょ</sup>

○ 文芸奨励賞

佐藤<sup>さとう</sup> 典子<sup>のりこ</sup>（高根沢町） 「ひと片の花」<sup>ひら はな</sup>

中村<sup>なかむら</sup> 早苗<sup>さなえ</sup>（宇都宮市） 「風羅坊」<sup>ふうらぼう</sup>

三浦<sup>みうら</sup> 昌子<sup>まさこ</sup>（宇都宮市） 「蛍の夜」<sup>ほたる よ</sup>

中村<sup>なかむら</sup> 國司<sup>くにじ</sup>（宇都宮市） 「猿麻栳」<sup>さるおがせ</sup>

大塚<sup>おおつか</sup> 好雄<sup>よしお</sup>（高根沢町） 「見る天井」<sup>み てんじょう</sup>

○ U25賞

該当なし

令和6年度第78回栃木県芸術祭文芸賞審査結果（川柳部門）

○ 応募者数 33人（28人）

○ 入賞者数 8人（8人）（ ）内は昨年度実績

【審査寸評】

○ 作品総括

全体的に斬新さに欠ける傾向が見られた。同時に、既視感のあるものが多いのが残念である。

ただ、高年齢の応募に老いの句が少ないのは良かった。前向きに日常をとらえているのは嬉しいことである。

新たに点字での応募には感謝したい。

○ 文芸賞 「<sup>あい</sup>愛」

10句にストーリー性を重視、句に破綻なく、題名は平凡であるが、表現に秀逸さを認める。

○ 準文芸賞 「<sup>みず</sup>水」

題名の「水」に沿ってまとめられている。  
句の完成度が高いことを評価する。

○ 準文芸賞 「<sup>おに</sup>鬼ごっこ」

川柳の原点である「軽み」のある作品。  
題名と句の関連性もあり、評価する。

【入賞者名・作品名】

○ 文芸賞

<sup>やすい</sup>安井 <sup>たかこ</sup>貴子（日光市） 「<sup>あい</sup>愛」

○ 準文芸賞

<sup>ふくだ</sup>福田 <sup>えいこ</sup>英子（日光市） 「<sup>みず</sup>水」

<sup>よこやま</sup>横山 <sup>なおし</sup>直史（真岡市） 「<sup>おに</sup>鬼ごっこ」

○ 文芸奨励賞

<sup>まつもと</sup>松本 とまと（鹿沼市） 「<sup>かわ</sup>川とダム」

<sup>たけうち</sup>竹内 <sup>たけの はな</sup>竹ノ花（宇都宮市） 「<sup>ふ</sup>踏ん張る<sup>ちから</sup>力」

<sup>たなか</sup>田中 <sup>らいせん</sup>来川（日光市） 「<sup>よせい</sup>余生」

<sup>たかはし</sup>高橋 <sup>おとじ</sup>音次（足利市） 「<sup>しろ</sup>白<sup>はと</sup>鳩」

<sup>なかむら</sup>中村 <sup>みねこ</sup>嶺子（宇都宮市） 「<sup>きんぎょ</sup>金魚ばち」

○ U25賞

該当なし